

氏名	上 田 久仁子
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 4317 号
学位授与年月日	平成15年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	児童・思春期の不安、恐怖、強迫および自我境界関連の自覚症状について
論文審査委員	主 査 教 授 切 池 信 夫      副主査 教 授 山 野 恒 一 副主査 教 授 廣 田 良 夫

### 論 文 内 容 の 要 旨

【目的】不安や恐怖は正常の児童思春期の精神発達過程の中で必ず生じてくるものであり、その後の正常発達過程で目立たなくなることもあれば、疾病となり日常生活に支障を来すものもある。そこで本研究では一般人口における児童期から思春期の不安、恐怖、強迫、自我境界関連などの自覚症状の出現率とその年齢推移について調査した。

【対象と方法】大阪府下にある某小学校、某中学校、某高校の10～18歳の男女学生、計1632名を対象とし、自己記入式の無記名によるアンケート調査を施行した。

【結果】恐怖に関連する項目は女子に多くみられた。そして他者からどのようにみられているかという対人恐怖は女子に高率に出現し、男子では口渇と尿意という自律神経系の症状が出現しやすかった。抑うつ症状は女子に多く出現し、加齢とともに増加傾向がみられた。また緊張・対人恐怖に関連する項目のうち「他人からみられると気になってしかたがない」、「顔が赤くなりはしないかと気になる」の2項目と、自我境界関連項目のうち「何かを想像すると、すぐそのことが誰かにおこる」、「物音（ザワザワ、ゴーゴー）がすると人の声で何か言っているようにきこえる」、「人が話をしていると、自分のことを言っているみたいでとても気になる」の3項目の有症率が15年前の研究結果に比して低年齢層から増加していた。

【結語】不安や恐怖などの自覚症状の有症率とその年齢推移について報告した。過去の研究結果との比較では緊張・対人恐怖関連項目と自我境界関連項目の一部で、有症率が低年齢層から顕著に増加していた。このことから、現代の児童思春期の学生において対人場面での不安に対する耐性の低下と自我境界の形成不全すなわち精神的成熟の遅れが示唆された。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【目的】不安や恐怖は正常の児童思春期の精神発達過程の中で必ず生じてくるものであり、その後の正常発達過程で目立たなくなることもあれば、疾病となり日常生活に支障を来すものもある。そこで本研究では一般集団における児童期から思春期の不安、恐怖、強迫、自我境界関連などの自覚症状の出現率とその年齢推移について調査した。

【対象と方法】大阪府下にある某小学校、某中学校、某高校の10～18歳の男女学生、計1632名を対象とし、自己記入式の無記名によるアンケート調査を施行した。

【結果】恐怖に関連する項目は女子に多くみられた。そして他者からどのようにみられているかという対人恐怖は女子に高率に出現し、男子では口渇と尿意という自律神経系の症状が出現しやすかった。抑うつ症状は女子に多く出現し、加齢とともに増加傾向がみられた。また緊張・対人恐怖に関連する項目のうち「他人からみられると気になってしかたがない」、「顔が赤くなりはしないかと気になる」の2項目と、自

我境界関連項目のうち「何かを想像すると、すぐそのことが誰かにおこる」、「物音（ザワザワ、ゴーゴー）がすると人の声で何か言っているようにきこえる」、「人が話をしていると、自分のことを言っているみたいでとても気になる」の3項目の有症率が15年前の研究結果に比して低年齢層から増加していた。

【結語】緊張・対人恐怖関連項目と自我境界関連項目の有症率が、15年前と比べて低年齢層から顕著に増加していたことから、現代の児童思春期の学生において対人場面での不安に対する耐性の低下と自我境界の形成不全すなわち精神的成熟の遅れが示唆された。以上の研究は、児童精神医学に新しい知見をもたらしたものであり、今後この領域の研究に寄与する点は少なくないと考えられる。よって本研究者は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと判定された。